

---

# ビー玉は夕陽に輝いて

夕里初美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ビー玉は夕陽に輝いて

### 【Nコード】

N8191E

### 【作者名】

夕里初美

### 【あらすじ】

高校生、近藤春樹の一日は何もなかった。彼は自分が生きていて何も得ているような気がしない。手首を切って、世界に色をつけることで暗い安らぎを得ていた。そんな春樹が送ったとある一日の、些細な出来事。きっかけかどうかは、まだわからない。

ラムネ瓶を割った。飛び出したビー玉が、河原の石の隙間に挟まった。

嘘臭い青が周りの白から浮き出ている。

自分が生み出した光景に違和感を覚えながら、近藤春樹はそれを踏み潰した。

静かな朝日は青い欠片と名前も知らない川を輝かせている。その中でも自分は輝いていないのだと思うと、彼にはどこか虚しく感じられた。

春樹は学校へ向かって歩き始めた。小石を踏んでじゃりじゃり鳴るたび、彼の心は軋んでいるようだった。

春樹の一日は何もなかった。もちろん彼の身には様々な出来事が降りかかっていた。一般の男子高校生並みに、多くのことを体験している。

しかしそれらを含めて、夜眠ると起きた時には何もなかった。朝の陽光の中に、いつの間にか消えてしまう。

同時にどこからか沸いてくる喪失感と気だるさが、彼の底に積もるのにそれほど時間はかからなかった。中学三年生になって間もない頃、春樹は初めて手首を切った。

焼けるような痛みと鮮やかな赤は、自分を染めて、世界の一部だと認めてくれるような気がした。

春樹は無意識に学生服の袖へ視線を送っていた。そこには彼の生きていく証が隠されている。彼が持っているものは、それだけだった。

放課後。春樹はクラスメイトに愛想笑いをして、教室を後にしよ

うとしていた。すると、

「ちよつと、近藤」

と呼び止められた。声の主、委員長の斉藤真紀は、春樹にほうきを押し付けた。彼は意味がわからないという顔で真紀を見つめる。

「昨日掃除サボったよね」

怒っている様子もなく、真紀はそう口にした。指摘されて春樹は、そつえば今週は掃除当番だったと思ひ出す。

それにしても、と彼は考える。相変わらず表情のない女だ。顔立ちを整っている方だが、とても不細工に思える。人間らしさが欠落しているんじゃないだろうか。

まあ俺が言えたことじゃないんだけどな。と春樹は作り笑いを浮かべた。

「用事があったんだよ。おかしいなあ、冠太に伝言頼んだけどなあ」  
嘘だった。相川冠太とは席が近くなったら話す程度の関係だ。彼が嫌いなわけではないが、友達だと思ってもいけない。どんなに親しかろうと、次の日には何も残っていないのだから。

ほんの一瞬、真紀は眉を吊り上げた。

「そついうことは伝わらなきゃ意味がないんだよ。今日はわたしと掃除してから帰って」

冷めた声色だった。まるで自制でもしているかのように。

棒読みよりも平坦で、しかし奥に抑揚が隠されている雰囲気。それに、春樹は微かな違和感を覚えながら頷いた。彼の脳裏に、なぜか今朝のビー玉がよぎった。

「そつち掃き終わつた？」

真紀の呼びかけに、春樹は学生服を脱ぎながら「ああ」は答えた。汗を吸ったTシャツが気持ち悪い。窓が閉じられていくにつれ、より暑さが増すようだった。

「近藤がしっかりしててよかった」

褒め言葉だろうか。窓を施錠しながらのささやきには、相変わらず感情がこもっていない。だから春樹は、彼女が本気で言っているのか皮肉で言っているのかよくわからず、返答に困った。とはいえ気が利いたことが言えるはずもない。

「別に」

拳句、彼はそっけない返事をした。

二人しかいない教室に、ロッカーを開ける鈍い音が響いた。真紀は彼にずい、と手を伸ばす。

「ほつき貸して。片付けるから」

春樹は言われるまま彼女にほつきを渡した。

途端、場の空気が変わった気がした。

真紀は目を見開いていた。はつきり動揺がわかるほどに。

その表情に春樹の方が驚いて、何事かと思っただけの視線をたどる。そして気づいた。上着を脱いでしまった己の迂闊さに嫌気が差した。

彼の手首には無数の傷が横切っていた。痛くはない。痛いとするなら、それは今、真紀の視線が刺さっているからに違いなかった。

慌てて手を引っ込め、彼女に視線を移す。真紀は食い入るように春樹を見つめていた。その瞳には彼女がおよそ見せないだろう感情の色が入り乱れている。

彼の中に疑問が沸いた。彼女は どうしてこんなにも激昂しているのだろう。確かに彼女は見てはいけないものを見てしまっただろう。慌てるのは無理もない。しかし、鉄仮面ともつかぬ彼女がここまで驚くものだろうか？

ふっ、と真紀の顔に表情が落とされた。儚げで、今にも壊れてしまいそうな。

「そうなんだ」

意味がわからない。

春樹の頭に血が昇った。同情しているつもりか。何も知らないくせに。

彼は思わず拳を握り締めた。すると突然、真紀は自分の袖口のボタンを外し始めた。

パチ、パチ。

彼女の白く、細い手首があらわになった。

「そうだったんだね」

春樹の拳がほどけた。てのひらがやけに汗ばんでいる。

真紀の手首には、春樹とおそろいの傷があった。

彼は呆然としていた。理解しようとしても、よくわからなかった。

「片思いだった」

目を伏せながらの唐突な台詞が胸を締めつける。

「相川冠太。中学の頃。ほとんど話したことなかったけど」

ぼつぼつと少女の口から言葉が紡がれていく。いつもとは違う意味での無表情は悲しげだった。たどたどしく話しながら、彼女の瞳は遠い場所を映している。

「普通にフラれて、全部が色褪せた。だから切った」

赤で世界に色をつけるために？

春樹はそれを声に出さなかったはずなのに、真紀は小さく首を縦に振った。あるいは、共感のようなものかもしれない。

「なにも言わず、なにも言えず、彼はふたつの手首を見つめていた。でも時間が経つにつれて、思い直した。気づいた。世界にはもう綺麗な色がついている。わたしが見ていなかっただけ」

無言を返す。それしかできなかった。

真紀は目をきゅつと閉じた。まぶたは震えているようにも見える。彼女の心にはどんな葛藤があったのだろうか。

やがて瞳を、つぼみがひらくようにそっと開けた。じっと春樹を見据えている。

「近藤もきつとわかってくるよ。ちょっと時間が必要なだけ。……多分ね」

はにかんだ笑みが頬をなでた。春樹はそれが理由もなく嬉しくて、悔しかった。

なんだよ、かわいい顔しちゃって。

少しばかり沈黙が続いた。陽だまりのように穏やかな時間だった。下校時刻を知らせるチャイムが軽妙に鳴り響いた。真紀は、

「ポジティブシンキング」

と残して、教室を後にした。それでも彼はその場にしばらく立ち尽くしていた。

春樹は河原に腰を降ろして、ぼんやり空を眺めていた。

夕陽が溶けて、空や水面を染めている。溜め息は風に流れて、紅の空に真っ白な飛行機雲を描いた。

世界は色に溢れている。空も。水面も。彼女も。自分も。

正直、冷静になって真紀とのやりとりを思い出すと、春樹は苦笑いしてしまう。

まったく、真面目そうに見えて案外恥ずかしい奴だ。抽象的で、結局解決には程遠い励まし。もしくは過去を語ることができる相手と見込まれただけかもしれないが。どちらにしろ春樹にとっては役に立たないのであって、彼女の自己満足に近いだろう。

頭を軽く振って、彼は立ち上がった。太陽も沈み始めた。そろそろ帰らないといけない。

と、視界の端でラムネ瓶が転がっているのを捉えた。わずかに考えた後、春樹はそれに近づいていった。

まだ世界を綺麗だなんて思えない。

だけ。

ラムネ瓶を割った。飛び出したビー玉が、河原の石の隙間に挟まった。

彼女の照れるような表情が浮かぶ。

「ポジティブシンキング、ね」

きつとまた、この台詞を思い出して馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばすことぐらいはできるだろう。

嘘臭い青の内側に、夕陽が閉じ込められている。ビー玉は小さな太陽のように輝いた。

今の春樹は、それを踏む気にはならなかった。明日どうなのかは、まだわからないけれど。



(後書き)

初投稿になります、夕里初美と申します。以後よろしくお願いします。

今回はある小説サイトに投稿した作品を改稿したものになります。

少し胸を締め付けられるようなお話をイメージして書きました。

皆様に読んで良かったと思っただけであれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8191e/>

---

ビー玉は夕陽に輝いて

2010年10月8日15時30分発行